



弘前忍者屋敷



弘前忍者屋敷

「弘前忍者屋敷」は日本で唯一現存する藩管理の甲賀流忍者屋敷であり、宝暦11(1761)年以降、江戸時代後期から存在していたとされています。この屋敷は忍者一族の住居として使用されていたわけではなく、「早道之者(はやみちのもの)」と呼ばれる弘前藩の忍者集団が、主に情報交換を行う詰所として使用されていました。

この屋敷がある森町界隈は、江戸時代には「目付(めつけ)」と言われる武士を取り締まる警察官が住んでおり、大事な時にはこの屋敷に刀を持って応援に駆け付けることになっていたそうです。つまり弘前藩一丸となった防衛体制があったのです。

屋敷内には忍者発見器や、壁の裏の隠し空間、屋敷の外を見張ったと考えられる見張窓など、随所に忍者屋敷ならではの特徴が見られます。他にも薬草を干していたとされる釘痕も多数残っていて、当時の忍者の生活の様子にも触れることができます。

弘前藩忍者集団「早道之者(はやみちのもの)」

この屋敷を拠点として活動していた「早道之者」とは、津軽四代藩主・信政が江戸で甲賀流忍者の中川小隼人(なかがわこはやと)らを家来として雇い、形成した弘前藩の忍者集団のことです。弘前藩の分限帳(藩士名簿)には、「早道之者」と書かれていて、約60名が名前を連ねていました。

早道之者は蝦夷地(北海道)で松前藩とアイヌの人々の動向調査や領内の治安維持、国境警備、他藩での諜報など様々な秘密任務を担っていました。

延宝2(1674)年に創設されて以降、一時的な解散、再結成を経ながらも函館戦争終結の明治3(1870)年まで存続、実に約196年間も続きました。





弘前忍者屋敷

江戸時代後期に建てられ、明治2(1869)年の古地図に残る棟方嘉吉(棟方一族は忍術家として早道之者を統率した一族)や早道之者の一族が管理者として記録が残っており、令和4年(2022)年春から「弘前忍者屋敷」として営業しております。



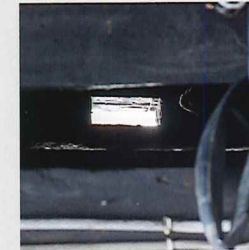
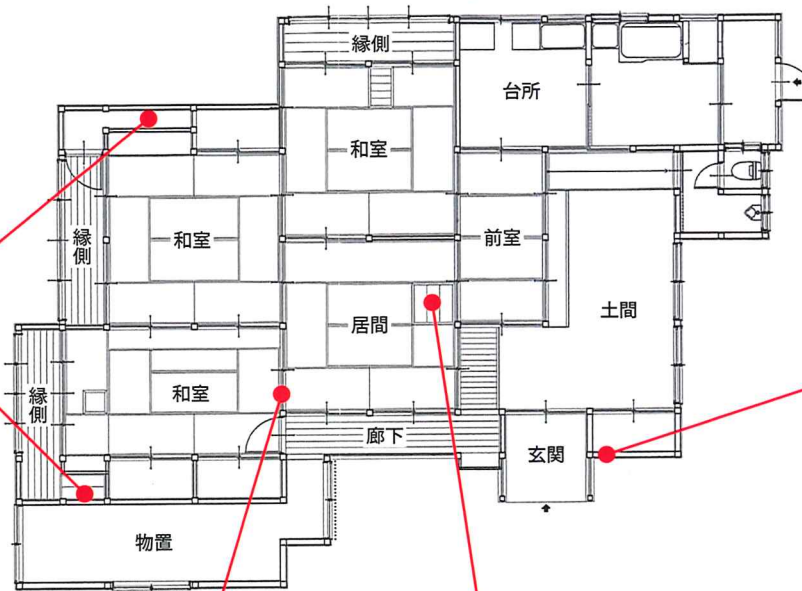
江戸時代、城下町の町割りの時、屋敷の地は茂森山を切り崩して整備された地。屋敷の裏は小山が残り、弘前市内で現在は見られない自然植物が今も生えている。約50年前、屋敷近くにはトリカブト(猛毒)が綺麗な花を咲かせていた。もしかすると、忍者が薬草や毒草を育てていたのだろう。



家内部の屋根は茅葺き屋根となっている、この上にトタン屋根が被(かぶ)せられていて外観だけでは分からなかった。



頭の部屋にある床の間裏にまわると、奥行92cm幅54cm高さ約2mの空間が存在。床板には指が入る穴があり、見つきりそうになると床板をはずして下にもぐり、外へ逃げ出すことができる。



玄関から入り振り返ると、外をうかがうための見張窓があり、外を見張ったと考えられている。



以前の屋敷所有者が「先代が屋敷を購入時、家の中には薬の匂いが充満していた」と伝える。室内の梁(はり)部分には、多くの釘穴が残る。薬となる薬草を干していたと思われる。薬草や火薬に詳しくた忍者の影が見え隠れする。



障子を開けて畳の居間への入口一角だけが板の間。踏むと「キキッ!」という音をたてる。侵入者を知らせる仕掛けとなっている。